

誠忠
傳

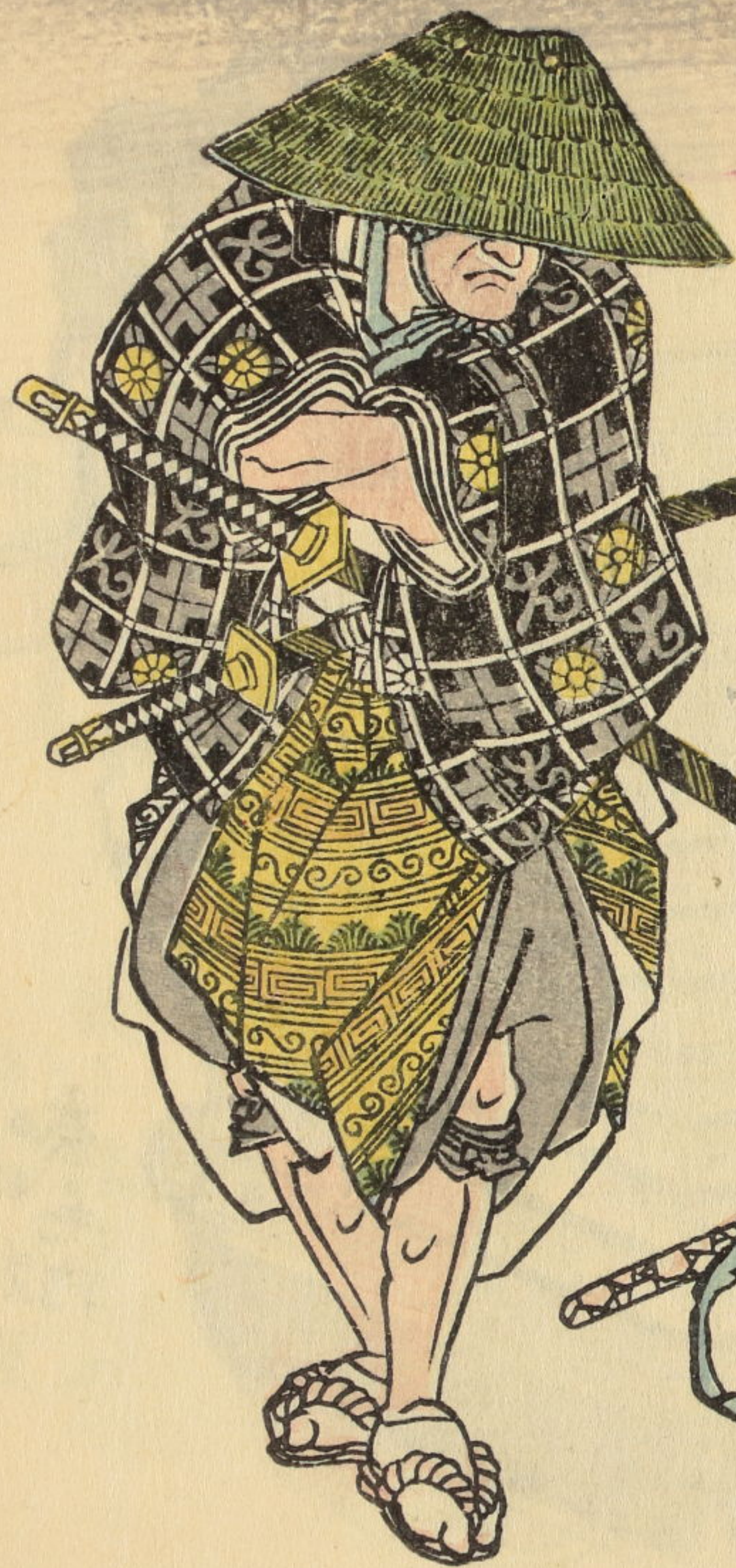
小次乃礎

集

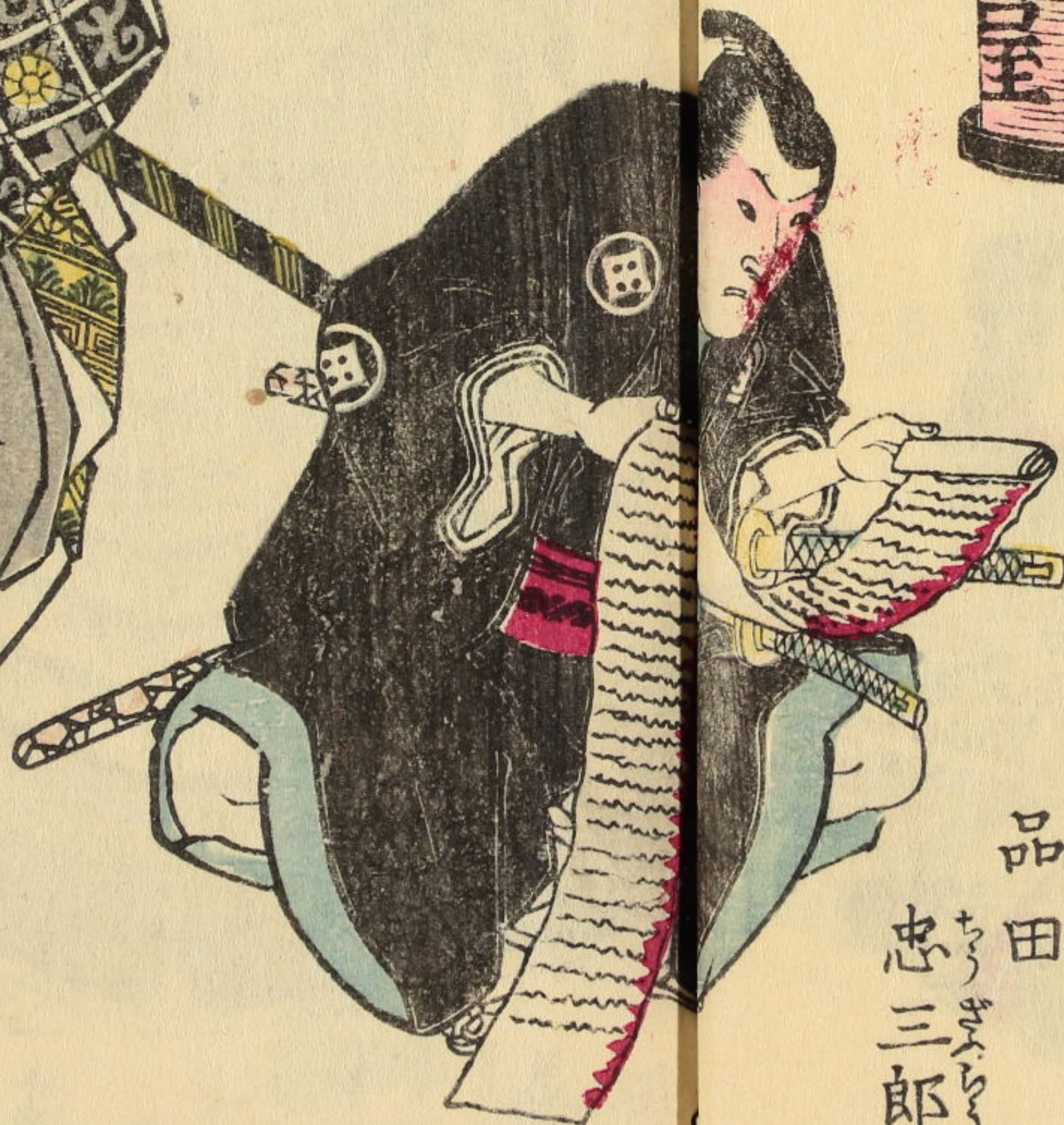
^ 13
2910
2







六法組の随一
唐天權兵衛

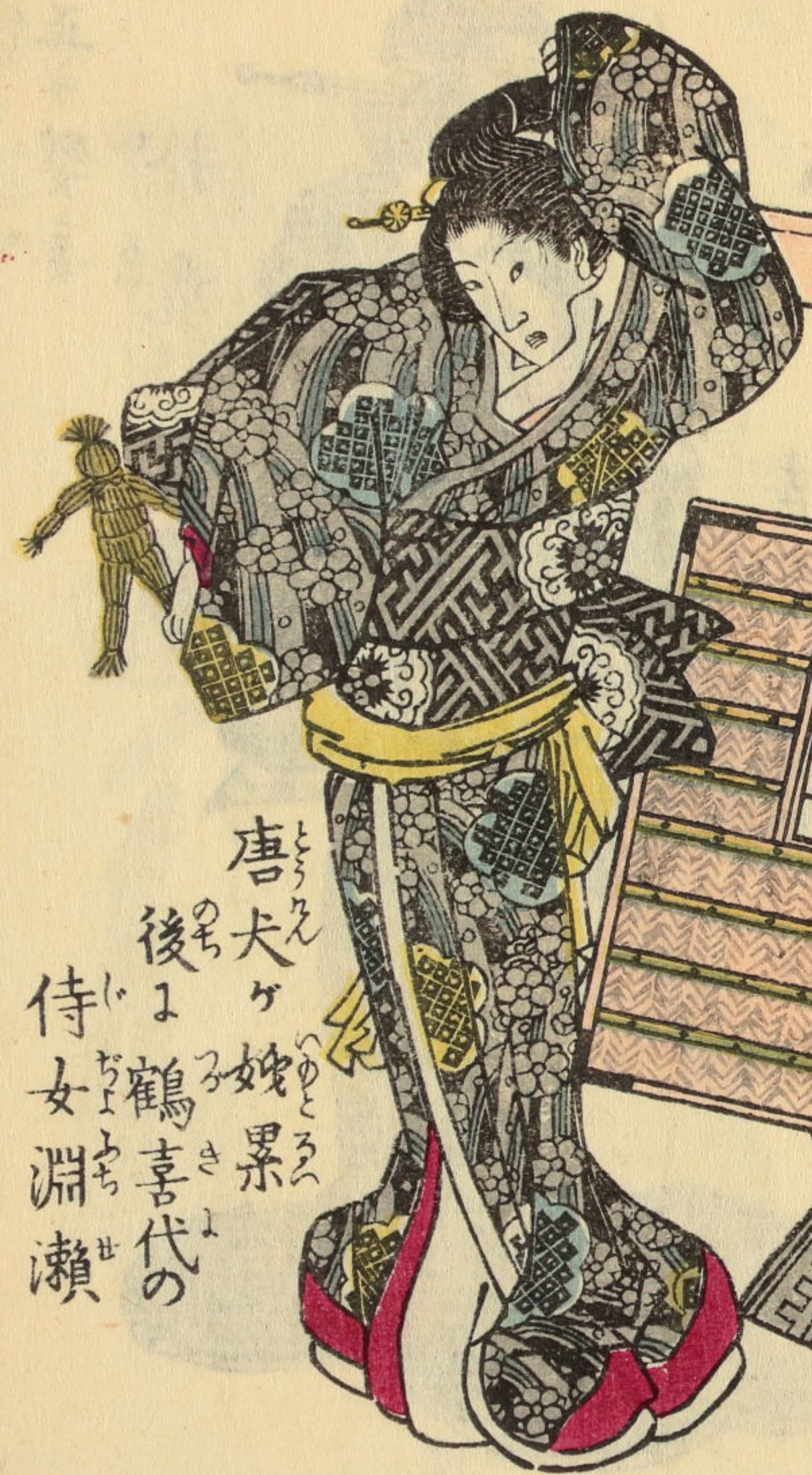


品田
忠三郎



娼門
真あ
晦日
の月
打破て
勿心知ろ
卵如
四角

雛妓
高浦



唐くわん犬いぬヶが姫ひめ累かさね
後のちのうしろ鶴つる喜き代よの
侍い女にょ淵ふち瀬せ

清水
うき

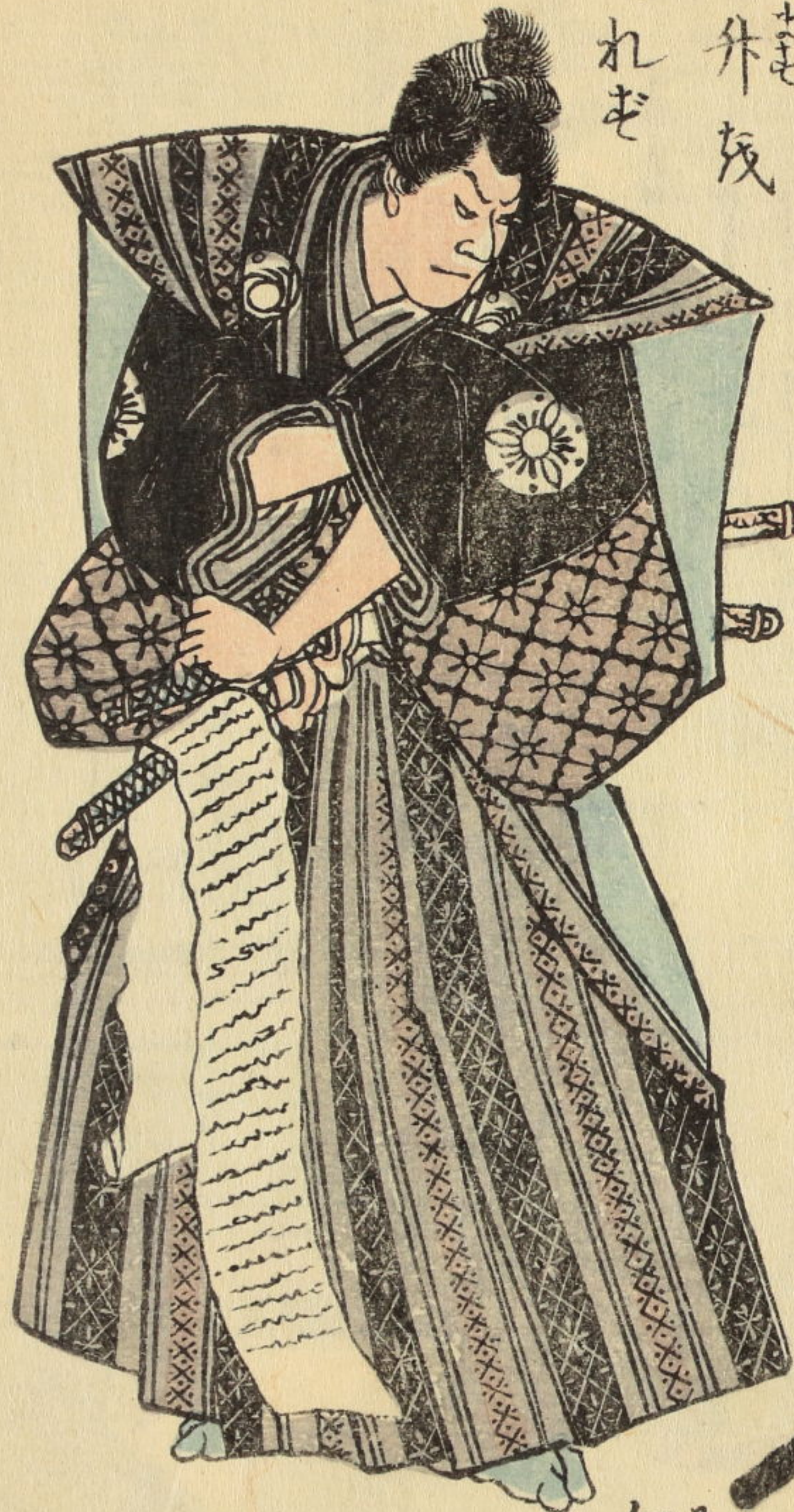
岩いわ冠かん
あき
すしき



下した僕やく
奈な毛も内うち



清きよ信のぶ兵へい衛ゑ善ぜん五ご妻つま田でん大おほ力りきのの一いつ井い藩はん



遁れぞ

升茂

竟小王法の

米を惣ふとりん

姑く倉中の

九郎

三男

仁木

鼠竊の
小人量る小
呈らむ

菅野の
帆助



弾正の壁妻
於麗

今様二模写
丹前の古風

梶が風呂

水

鳴神
右衛門

梶が風呂
の湯女
阿梶



奥州

塩竈乃

遠景



誠忠列傳 句読講釈 珍説千代磯二輯卷之上

東京 為永春水著

第七回

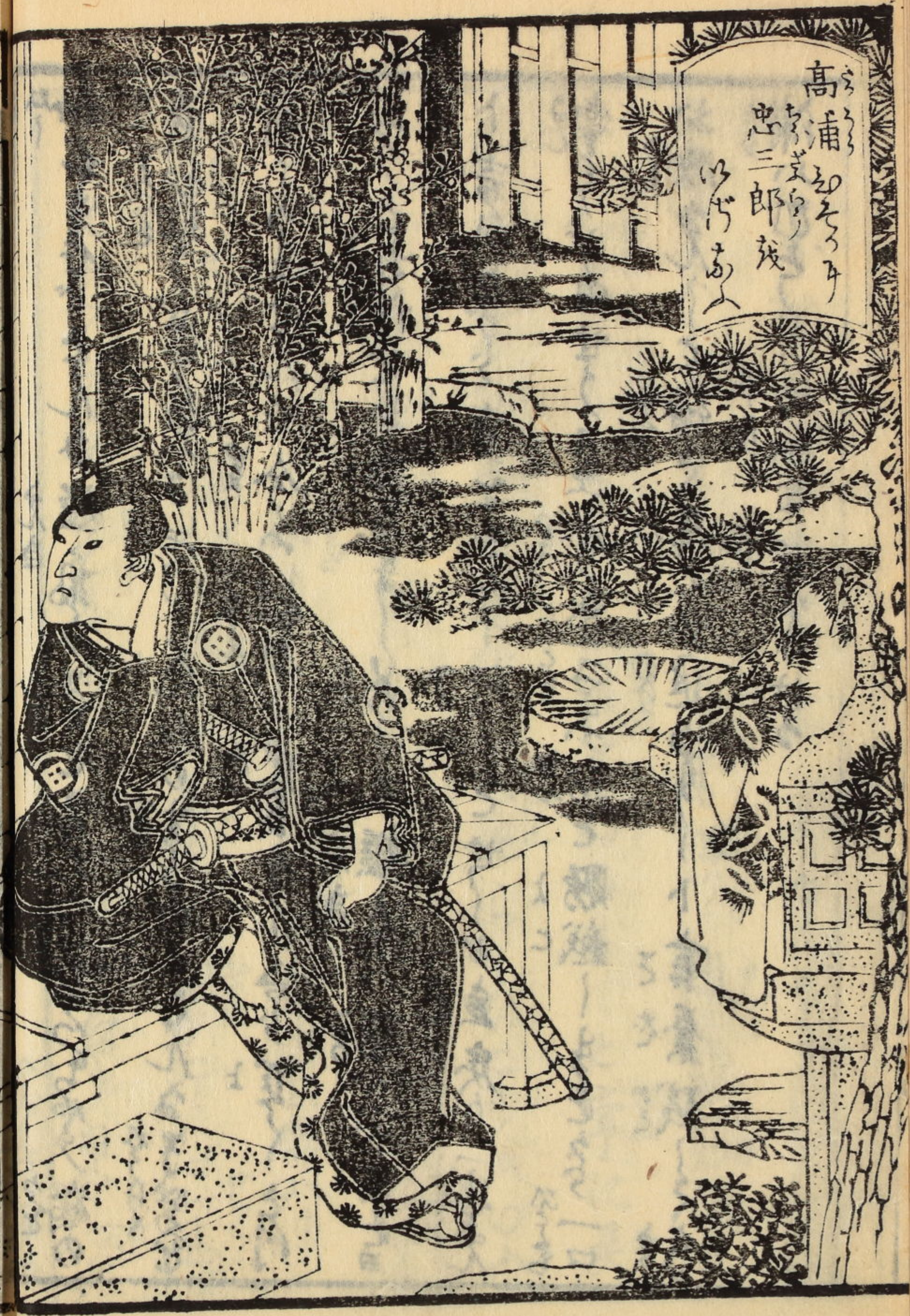
せんをり 前輯小のく入せし鶴在代君の側中那瀬瀨といふもの
あつる由ふ運流の若娘し其身の命を落とも厭つて
斯る悪りてをせしといふ瀬篠と索ゆるあとの頃三矢の
傾城町ふ三浦屋の高尾とて世の響きたる名妓ありて
昔古の地獄初看などおも立まらうらう容色は

まればと 貴客ある中ふふ回忠三郎といふ仁小末の物束せしうある
如ゆる貴人き家より黄金の山を積とともるびくま
とを盟ひけるおしも噴ハ如月の残の雪も消ゆをまど
春家き宵をささ不忠三郎ハ肌薄赤寝衣女どもん
がらと人坊頼の良彦き形るころ人廊下より忍び
見しと新枝き浦 一忠さんよき来き進んお異
るまうとこ工娼妓がモウくをと探切くお在るまはく
速く逢せと進もうと思ひも今夜はまこの

おくと彼方のるが悪くつと言ひりけり顔をかきまら
簪やく簪の中を撥く おへき浦さんお茶達のなる茶のほ
風体をしと面目わが先刻の姿を懐き見らや、お梅も
静たしと居る是れ久々今秋来と第一逢せとるのやうな
るちお茶あぐも進んて梅子を閉ふと思ひさう九時と
おと直ふ揚いり島もあわて隠れて居やし、お三
お茶とんも昔のお身かちとサ言ふのも寔お茶
ざるまが不は合るるがばいり、お梅おまをらんま

たのぶらう真ふお可憐うまをうぶるまヨあ一お茶まむら
もんふ言つて呉る方の入ふ不曉しひがの候令改ごう
翁の身のうぶも五十四郡の徳候と相合にあ
張合らるゝ雲があふ一にも異りねくあ力上ぶらう連も
たどまらぬ人野しどけまども是まふふく人ひとに
取らまらぬ人死んども死しまらぬ人ひとに
彼方の為精と相候が究つこのつ子こうら一てまらぬ
うりかふと言つつけでるありませんが娘まふさんまふと

言ふお侍士が内燈の因那ふ獄合とあるまふまふのを
獨枝が閉らるるこのんぶらう急ふ和若と呼びふ進あひ
きつがさんぎまらヨあまらまらも行方へ往くい
ひん得心でけ身を呼びふとこのく切離く呉れき
ろとまのり相候りあ一て身精と得心とくなるまら
ふらひら獨枝も氣を標ハるませんけままども
第一ひ一とまらるるこの目あや和若へまらまら
うら寧死んどもは素しふりとのんんな發はめいめい



暁の夜風のあらぐと身も凍るるさぬくふ徳三郎
只揚りぬふ思案も有明の月さへ曇る時さるれば
更程とひそり言ふ所の浦の伝切ぐさ尾に逢
つゝ梅子を開けたりよく彼方ハ身清の相ざん荒
場へまきまのりひ令を尾が不義かでもまきこ
言ふその時やア主行ハ主人ふ買ひまの身のうぬ
昏忘ハ言ひまは若然うかりやけ身も男ど娘を
と出まると云ふ浦があらぐと見見と言ふけいさども

思按ふあらぬその時ハ彼方がねくもあつたとき
只言入りのおきへ縋伸は方ひそりの應説て本
意も遠ぶふ大死でもまきあつたふらちやア梅の
夏風の上ハ塗りのハテおねるさる買らうト工風さるぐ
歩行ゆく浩る折しも向より小倉橋の橋たかり
朱鞘の二刀扱たまき雲実くおき大男の朱は
さる這方ハ屋宛ふおけりねるおもつとも彼の時
士ふ初通さるがちハヤイおねるさるあつたかお道と

言ひくさく人ふ突箇門七海ふと思ふの喧嘩置ひ
らけ方も得るの殊ふ三矢のは境心機とさ
こと言ひまて六度大組の仲間へまぬ見まぶき
方も腰ふ大小腰りふまうて居るでもものやか
言ひけ身と誰ごとあひふ六法組のそのうちぞ座
犬組の首領と噂はまる度大の権き清と六は身の
まどと知らむ交り相争ひ誰れも厭ひらるるをまて
有妻の情負とあらト及おくらまぶ忠三郎ハ

きらとせーが心とまづもあつて儲けうねぐ開あよバ
度大組の権き清とまぬと六貴所のおとどどさう
まはら私ハお田忠三郎とて両腰とを差せ教さぬ
の身の屋院ふありのままに進行のころころこころか
まのの不測法真平は免下さのまゝそのお賭活より
まご先ふ貴所を男と見うけまゝと折り入りの
一ツのお腹ハお腰とけ下さいませうら 権ハテな
説言ハ跡ふく男と見うけ七頼ミ度ひとふ面

白の言入かづらふも後より類もまじやうがその
類もよいと云入次ハ那三浦屋のまじ尾が角受の
影子を入まじく異のまじとト云入まじく物り忠三
郎 夫と云入後まじく貴所さぬが推ハテ蛇の
道ハ蛇と云く曲膝を住居ふる七居る俺們宮尾
吉受と角受の沙汰もそのまじく尾ふお田と
よるまじのついで居るまじも組子のものがまじく
敏く耳に遠入つて居るまじ 夫ハ然う何もうも

也存知下今ゆらまじと云入まじおぢがぬおぢ
通り宮尾と云く末の約束もまじく私今まじ人
まじくまじく一かづまじくまじくまじくまじく
の相まじハ猪俣私一個の腰袋まじく掃掃まじく
まじくおぢがぬまじくまじくおぢがぬまじくまじく
何卒貴所の也威光でまじく尾を那方へまじく
まじく推ハまじくまじくけ身まじく推まじくまじく見まじく
あつまじくまじく脊が舎利まじくまじくまじくまじく
まじくまじくまじくまじくまじくまじくまじくまじく

急度きんのらきん立貴人たきんでも高家たけけでも先まきの宜いかどが
実まことがらまことて面白おもしろの三浦屋みづらやの内うち燈あかりへあかりつてあかり是これで
中ちゆうぞちゆうるちゆう短たんくたんふたん周しゆうふしゆうましゆうぎしゆうましゆうくしゆう顔かほ茶ちやせちやあちやしちやこ
づづけけるるがが一いち番ばん近ちか道みちはは権けんまま清せい合あつつささおおまま六む
ままままでで見みるる居ゐるる其その三さん日にちの内うち六むつつ日にちののままら
急きん度ど形かたちももつつけけてて見みせせまませせうう 忠ちゆう一いちんんらら四し集しゆう
おお下したささいいままははららおお務むををももららささううややららははりり首くび
尾びよよくくららううああらら今いま晚ばんののおお膳ぜん活かつののおお私しのの

身みハハ何なに振ふるりりとも貴き新しんささぬぬののおおととろろままうう廿にじゅう命めいも
ささららくく惜おしととまませせぬぬ 権けんハハ然しかららうう言いふふままららむむどどはは方かたハ
をを跡あとへへ引ひくくららぬぬ唐たう犬けん権けんまま清せい合あつつささおおまま六む
今いま實まことハハはは終しゆう人にん目めふふままぬぬそのそのううちちふふおお私しもも速はや
久く々々ツツせせんん 忠ちゆうハハ左ひだり板いたををぶぶ権けんまま清せい合あつつささおお私しのの内うち
みみハハ急きん度ど吉きちたた吉きち 権けんハハテテ薄うすくく言いふふららむむおお私しのの胸むねふ
ああららりり活かつめめくく居ゐるるトト示ししし合あ合あををくく右みぎたたりりそのその
場ばハハままのの別わか道みちゆゆく

何もだんば 権き傷が由縁もなぐ 仮初ふ行合
 忠三郎が頼みふより くる大の身を引
 ありのつとも 兼忽のいより あり今世の人情
 ありあるまじき 度うらけ 時だんの人ごころ
 唯勇をえとのと 表ぬ張りの男を 達ると面目と
 まるまじく 初もまじく 籠ましく 人を害し
 傷ふよと 使あるりと 思ひ遠へ 悪か来を
 ありゆゑぬ 其頃ゆつた 流行るは 男ごころ

組の多

神祇組 鶴鈴組 白柄組
 狭棒組 唐犬組 荒蕨組
 是を号し 六法組と 又 耶橋 藤も け群
 ありお田が 頼み受し ありのり 近世の
 弱きを 披け 強きを 拵く 侠客 ありまふ わらね
 ども あり 死法 あり 者あり 御代の 余光 あり

第八回

斯り一後も忠三郎の公元を思ふも次の日酒
肴を携へて権左衛門が家小尋ねぬ夜茶を
らざ對面せし夏の夜びを演ぢり其お茶を
那一条を猶異くも頼と盡ま三日のうちに
吾た右のわらう堅く突つて歸るみぞを流れて
権左衛門の兼く自己が組子とある破落者を
呼び集めろの酒肴を呑み喰はせ諸忠三郎が
頼との思ふ箇極と物語は案より火の中水の

底へ飛び込む夏も秋ひるま向へ見むの若
俊ども況て最前忠三郎が持来の酒をひきき
夏由衣をやら解の一盃拭燥あつく坊の思ふも
まぐ三浦屋の内澄へ渡り身受の邪テとさる
みどくまぬるの夏を乃やうより三矢堀の埋伏
あ七夜深く啼く萩葉をたらまりやまぶらうけも
夏も七夜令附流し供人ありとも俺們が心を
合せ中斷を見ましまし蒐るる千の一本も過ら

まゝと言話を探へく言ふやどみ権を流も是み
同意一を欲権を流と首領としく血気の吐使
十四人三矢堀み針まろく小差み懸てん侍やどふ
折しも村雨降りおき路の黒白も別らざるふ場り
掛り頼兼主後史と見るより権を流等々各々
又と抜到く物をも言ふぞ吹く菟うを流る大
家の侍ども争きまらも此とも澄がど抜らむせ
つ吹ひまは這方ハまより吹落者の血氣ハ

任まるたなりみそ太刀筋さても定らるるね侍ひ
ぞみ所三らまはの高言引くくくへむき
と逃げまを指退きどと侍どもまみ退つる那雲
押指十四人シの破落者ハま残るなく討是
けるその中み権を流ハちまより一七頼兼を流
討んと思ふぞ供侍の大勢ハ組子ののふうち
任せ頼兼の駕まらりみ人まらりしを見まらし
忍びありつ一討中をの簾みまらり折も

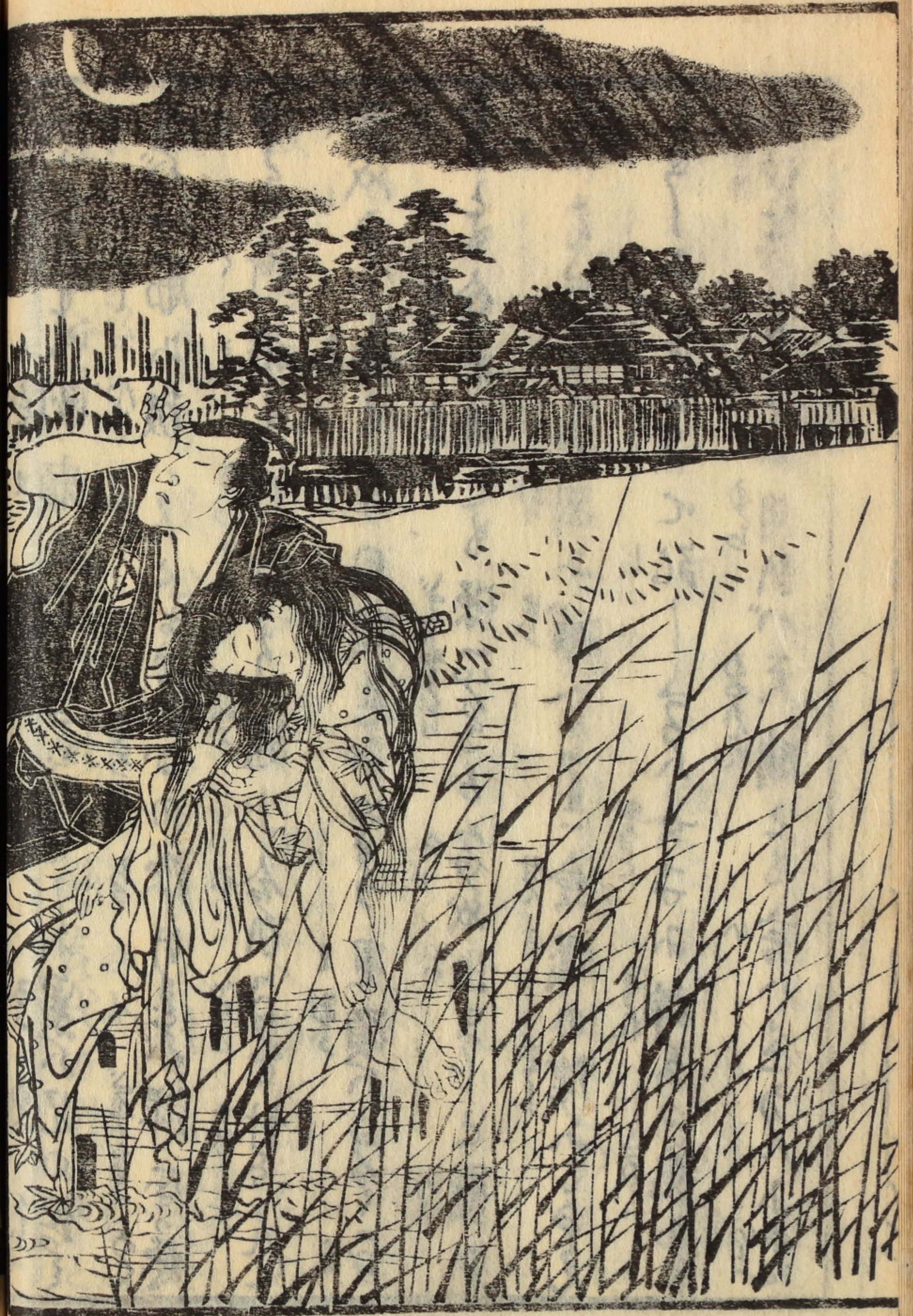
あきぎぶぶらう ちやうね まんやがら まぐくせん
篠原武十郎八頼兼の三矢通ひを種く種ませし
やぶふ良薬口ふ苦く終ふ同通ひを遠ざけし
あししひめ おぶらうらうら せき ちやうね
忠臣元二の武十郎公のうちふ思ふやう 兼原殿の
曲輪通ひおん供とをも多うぬみ途中の美夏の
あらんもおまじぶおん同通ひハ許さまじぶとも見舞ふ
お供してた文あるときのおぼふ立んとまより夜毎ふ
主君より 半町たうりも後ふ附く路次ふ紙つけ
けつが果しく今宵の強劫を遠目ふと見ふ

よりも飛鳥のどく五ヶ寄つて権き清をおし
今せう我ひが忠心集る武十郎がまるとま又を
のらうね教首行の疾疫を負ひくとも流る
名譽の唐犬権き清一歩も退くど終ふやうく討ま
ける是れより忠三郎がまをも悩むと権き清も
十四人こま犬起とより一変さて是れもろき次
あり今ふ遠権き清ふ一個の妹ありその名を果と
呼ぶが容貌も人並み女子の生色もみみ

ぶげの 武藝を好むのまう御支力あるゆゑ小兄が討を
まを同よりもする頼業が倣まこと一筋の圓ひ
有り元念あもまこと口晴しけまぶ女でこそめまは
悪く晴まをくまくと獨り心を苦くあつて死
念の月日を送るより速くも仁本彈正ふゆ者
報知うけんまとまくと弾正の御ふひらの
伎倆をよけ後公の者ふ言付け種くみ欺まを
累を味方ふ引付けつたま鶴彦代の側女中と

み一各をも剛瀬とあらうまを小果の兄の
を一筋の報はんとおの心の次けまぶ彈正の悪
事ふ荷擔し内外より通し合ひのりを針さんと
物成まり傳もりの破まふのり見顔のまを
ありとも命を捨ても深し考が各成出まると盟ひ
あがたことく政園の捕へらま合議の端もるま
とせしふまを端て記しつる女子小稀ある魂あ
はむまをまをりの用ひば天晴とも言はまらん小

いづれか
須臾
月乃
萩



思ひ百年の血路り一ひの世に
 今よりあはれみなりけり

いふ人ひくえ
 りる瓦

川辺の草あそよくと浪あそせく物あまき清ら
 志も忠三郎の流はあつら女の花骸縋り引あげ月
 影不頼うららめ眼あきらむ
 一儲も足敷うい

ありさぬはね安あさせまの種もみ物と苦も
 度父の権ま清まをねんごるほど支も袷も権清
 たりり十四人シ散き其場あ命と殺し籠も
 綱も切果しあ那方ハヤしく身受の相法完早
 今宵とつづまりて三矢川より船あませ鏡へ根
 引と街の取沙汰兼て覚悟も今さらあ物ハ
 早種うつとも愛とも別ねその所へる尾が許より
 送り一選書送も今宵ハと書送し

筆の跡見るふ心も孔ろくたろり慙つねまをも後返り
近けせめて六那船が良あろうら顔見と死るバ侶
俱ふと後と養へて来る道ふ峰を峻けびる尾八甲
根引せらま一殿と嫌ひ三俣川でらる今船
く川へ抛吹ふあひしを正しく響く勢も力も張も
援をそしがけうあハ死骸と尋ねおしうけ世の名残
死頼ろりと今一丁目と川系ふ流ひそ尋ねしふそね
編みり今け之流を芳りしを引のげくけのさあを

見るみつけもあてあつて我身のあやまり身の分
限も各へ曲輪を一と峰むまとも二と六やぬ金盛の
太夫ふ流く別流を重ぬ親の良見も世の義理も
空吹風と思ひしが我とら者ささるる尾ハ大家ふ
根引ささるる一船を棠へん那嫌のささるる根
多流等十四人シの者ささるる可憎命を没させし
家一目の迷ひゆ家懐めとせんとたろりあそ後悔の
他ろりけり

是より後忠三郎の巻会の警を切らぬ衣を墨ふ
 髪つても三矢の所の行通りふき尾が乳顔と
 厚く葬り権き清号自他がその亡跡を吊ふんと
 重ぬ一舎の草庵をひまびるも道徳と改め
 道公堅固ふ生涯を行ひまゐり終りしとぞ
 ○道徳字尾が夏ふ然と六指きまぐの吳絶あり
 考合せり下回小鏡べー

珍説千代磯二輯卷之上了

誠忠列傳 珍説千代磯二輯卷之中

第九回 東京 為永春水著

君子と欺くふ道よりてまこと宜あるるま実山や人を
 計らんときるふ其好じきころ小徳とて道を計れ
 計るに得どとのよまなる一命は兵清佐鬼貫頼
 兼を押し自己が子息石を世と世ふ立んと
 仁木弾正等と蜜煤を企て頼兼小酒と初め

不行跡ふぎょうせきの做なさんととらふ頼兼文武よりかねぶぶの良将りやうしやうみして
あつも温順ぬくまの君子きんしふ在ありませむとまを歌うたき得えん
変かはらつとも難たきとらふとも頼兼よりかねの性さがとくく深ふかく
書籍しやうせきを好あむのバ井根いね宗むね等らがとま倭わ弁利べんり
口の者ものをりつて其道そのみちより取入とりいらせよまおを見みたる
あつ余あまり也館このゐみのを在ありませむあんあんひもひまが
まきあん病やまひきを深ふかく一家いけ中の歌うたまけらぬ
あつ也背このむ散さんのうらまはだ一夜ひとよ花街はなまちへお出でのま漢かん

倭わの文字あざなみも通とト歌うたを詠よト詩うたを賦ふとるも
君きみもあつとらふもあん題たいどもあつとらふも那なま
等らが作つくも見みとらふも又またあつとらふのあん題たいと
種たぐひふ動うごめりる女子むすめの身みあつ倭わ漢かんふつと
賓客ひんかくのあつ題たいみよとあつ作つくあ詩歌うたをさると
とまもまつ一具ひとつさつんと物ものまき大将たいしやうも是これより
かかのうらまはつ終つひふ不行跡ふぎょうせきの暮つひらせぬの離川りがはの
下館しもゐへ隠居いんきよの身みとらふもあつとらふ道徳みちとくのよく

時を得くらのよ類兼の公達鶴存代をえ亡
る縁ての大望成徳せんときあづくみ計ることども
若君のおん劔久政因松枝の支個ありて昼
夜を日るまで守獲りてあぞ運送も同を獲り
得ねば奈何おもしくは二個と思ふ者つて落さんと
那剛瀨を初めとて一味せし者どもを自己と様
出し奥殿の入りまきあきて愛みあひて斗さども政
岡松枝の支個ハハ剛咫尺百つらつら女壘ふさ

心せゆのさほど今もバ剛瀨がとくせしもたらしもち
政園の捕へらと其所み命と没せしより憶あ
二個が忠信義を運送の中にありながら昼夜續
一更も由断せむ知君を守傳へ運送は微妙功とい
へし登時多清佐鬼若ハ剛瀨が捕へらとて
大なるらび髪まきしがま場もまらむ死せしふより
あハ安堵あるといども是より伎倆の破さゆふより
りやまると公と痛む仁本と極きて淡合ハ弾正宛

と打ち笑ひ是れ生きた味方ありて六骨一の存
りりその由多其うねく徳書の名人澤井勘
のいふふりつね松枝節と助が筆跡ふ仍せしる
規煙の一札と怒りさせ異殿の廣庭なる水東の
隅ふ埋めおきしう其文の大概と中六俺們支個
兼く史輝の契物とて一國家の権勢を全り
賞罰とて己が終ふせんと思へども兵衛佐鬼貫仁本
深心のま個ありて六俺們が大望成然致まど何卒

諸悪神の力をもちて鬼貫彈正の死を賜ふあ
る國家と掌極ささんとも俺們がらろの終
哀懇納受らぬつとと猶怖ろしき夏ともと文
中ふ書加へ改圖松枝五名ふし之他ふひらぐ徳の
移をのりて惟りく二ツの業人形のおのく咽と思
まき府へ入寸むろりの針と打しを彼願書と侶俱ふ
八重刺しと箱ふ収め伴の所へ埋まら九バ彼側が
死しつるを内吟味の席ふあを其伴板の作せり

まん大関 願が政園の懐みせし一品を奪はん
せし由曲者なるんと捕へしを備へて死し
只何ともゆりて心得ごとし那尚曲者なるん
那が自道具衣類ハ素より秘屋の隅々
疑ハしきものありてふさるもの怪しく
とら政園松枝密通せしとの取沙汰
折を見合せに忍び逢んとせしとら
見物もらま更の破きふらんとせしとら

場心あめ敷せし那苦しき事終りぬ
幸ひ不斯くしてとらるもの多し
庭子の者ふ言付七件の願書を焼か
お庭を掃除せしその塵を埋めん
定を焼りしふ初る怪しき一
泰せしと言ふ甘き政園松枝
むるとも那等が方お錠
授けしを奪ひし七人の傍り

二
三
四
五
六
七
八
九
十



きん正今以時とらぶとまると手にさるやふ鏡初む
まぶ鬼貫園く横を打ち通さぬも針さまより
早速きむねたうらんとまより直ふお仕しく初君の
口茶ふおの改園松枝を呼おし測瀨がりを吟味を
とき縁へより伎倆一通り孝子どもが彼願書を
園極くのまより城おせしときさかきあぞ
まふよらん鬼貫ハのよく兩個を不義と言ひを
殺し命をうるといふども忠義一島の改松枝

潔白小言ひひかけども弾正が針さるぞく那あが方史
院地をく鬼貫が言ふ所史録書おも甘く松枝が
筆跡ふ遠らぬ願書のま共縁ひ八道まぐく黒白
別らぬそのうちおん目通りハ慥ひごとくと彼二個をば
初君の右側を遠ざけんとたうらふ鶴喜代ハ改松と
須臾もきりせとらふらむと推へ遠ざけんとま
時ハ甚しくびがうらむハ是非なく改松をそ終
さうと前を助一個ハ身の疑ひの晴くま

急度護之ぬえしと全日よりしく鶴森代の地
前を遠ざけしとを 活悦分両頭 友ふまを 鑑
外紀左邊のが若黨ふ後井丹助との入者あり 鑑
代の者の眸よりが如稚より二親み別色 孤とより
けるを外紀左邊の深く 隣を 加少のともよりより 傍
元ふ百伎ひつ今 稔ハ 寔早二十一才 素より 正
路の性ともく 最老寔方ふ 仕方ふ 外紀も 郡
み心をもり 蜜狭の席とよりとも 彼丹助一個ハ

次の間へきく 壺まで小用を言ひ付ふ 何時の程あり
け丹助 仁本 弾正 ありき 那考が 逆意ふ 一味
あて 外紀が 方より 蜜狭 せしり 何れ 寄らば 書き
怒り 弾正が 行へ 内通 する あり 仁本ハ 鎌倉 倉ふ 在
みくら 本國より 外紀とより 忠告の 軍うち ありき
ひそり 内疾 せし 変生を 知ら ざると ころ ころ ざれば
変せ 伎倆 あり 使り よく しく 逆意を 尋ら せける
備も 此丹助が 奈何 あり 由あり 勿稚より 外紀が

多岐を受多岐 成ふ本かせり 乱し 運使み存権
せしとりのその 非流りを蒙るふさる 悪友み初めらる
塩寛明神の象程を見物み出する 途中みせ一
個の婢女を見初めしより 意慕の思の堪がごとく
こそが香の迷入さる 地外死が回恩を忘る
世の悪名を遺せし 変仕氣ののりつと 言ひるがら
最口端しきりけり 現や古語みも人仕奉る
とて戒むるふらふらと 迷ひ安く悟り難く戒め

難く慎むがきり 悔ふ色の道るべし 丹助が一時の
迷ひみ終身を忘るし 乙次の回つふ委し 死を遠く
戯さふ他さふ知し ほどは皆実説を振りぬく 夫の
枝葉を副るさるる 巻を弄くのまじ初達下の回を看
ぬるとも 浮る所を回を弄る ぬき 初る時宜ふ 及ぶとも
主親のり 須臾も忘るる ほどよし 迷ふトと
身み引鏡べし さいひさる 呆放る 冊子も自ら 初善
愚悪の端とも さらんと 流るる 例のむ婆かのみ

第十回

塩竈明神の遠方なる濱辺の御り水菜の鉢

群集するその日の夕方と御茶屋の入りとありとあり

二個連 丹さん 丹さん 丹さん 丹さん

丹助ハイ使が宜しうござんませう私も大きお草外

まじこ 戈ハ然うござんせう余程な道と歩行さうら丹ハ

まよ私ハはねぬ人の大勢ある所へ参つこのハ初めに

ござんせうら人の行参るものと云ふものを余程な

公配

公配と云ふはまこと戈ハ〜お参りお願ひ有つてまじ

鎌倉の懸花を知らぬうらそんな言ふけ

ども翌日あも旦那の由供をもたて鎌倉へ往つて

見ませ毎日常所へ往つてもけくかゝる人だつた

のサトキニ丹さん先刻鳥渡見つけに帰る余程

義しものぶやアねらう丹ハホンニお参り見りにお

方セト言ひつけに物思入〜氣に満つて

ついで居る戈ハコウ丹さんお参り那女ハひびく氣に

巻や角おのりこのハ私一のあやまりあうく仁林
さぬのお妻あんぞが善堂づきの私お何振まり
ままののウモウく只今のお咄と構公おのひ
切りもーさオコレサそんなふを極くたふら
あつものり假令仁林さぬのお妻でも意ハ思案の
外とよるかあう中一辨女とよああの外西
極楽のやうお見ても内笑氷性なのごう
僕ふあわらぶいまんども思ふ心随ぶん遠方のあ

向中心何振あもあう中をノサ然しとお茶ハ思案
くと丈さうお言ひさうけきどもお前ぶらて今の
着さぶら心持あうひらを何振お世もあて
見え随ぶん田家老ぶらてのさぬものでもお
のサ丹へ〜お前さんもんごりとおああやる善
堂の私が身と務お碎ひて勤めとゆい〜えが
外記の家来心ごらるまをののせそんな立身が
来〜まうもはののりオハテ夫がお茶のおさ



えまひそろまか
丹助請小逆徒の
掛買入夥

了簡とゆふの心新ふ言のま腹と立まるとも
 知るねんがおきつ減ふ直直るる何極もる交
 人の善なるりが善きとやもあつやせん 諭す心直
 者夫痴漢の果各とて言つてあつるふひぶら
 遊す邪曲と交もるねんしや男も立ねとふ
 ののサ交ふ折ちや咄しものりやまが交ハマア今
 目小限と交てもねんがおきも男一死とをねん
 一旦初ふと思つる婦女の身元と交つ折る
 及べね交とあまらめて今まら止ふまるとふのんまり
 智恵のねんをまらふとあつるやうマアく此身小但
 せく交るせんお茶の男の捨るやうなるるねん
 から丹へ左板から那か妻さふ心も 女へ三万ふ
 己身の物小あつるヨト咄し折るるやうくと最あ
 見初一那女のま徒あつる七八個連と隣りの
 茶店入来つて交と見るとり丹助ハ交ふる
 りとたりりあまらふとら小身小とらと女を清つ

了簡とゆふの心新ふ言のま腹と立まるとも
 知るねんがおきつ減ふ直直るる何極もる交
 人の善なるりが善きとやもあつやせん 諭す心直
 者夫痴漢の果各とて言つてあつるふひぶら
 遊す邪曲と交もるねんしや男も立ねとふ
 ののサ交ふ折ちや咄しものりやまが交ハマア今
 目小限と交てもねんがおきも男一死とをねん
 一旦初ふと思つる婦女の身元と交つ折る

袖を引き 丹下素直 一と云 女ハコレサあづうふぬ女
香込ん心居るうら 丹下何振しては好へ来まき
らうね人 女ハ十三那 一舞も 控電さ女へおまりの人
あこのごうら 爰お待合せく 居るう大うははえせ
通るごらうと思ひふ遠へきくおすく 隣の家
店へ送入ることを幸ひ 那女の供をしく居る 四寸
たりの男ハ 深井好虎と云つて 仁木さあぬの
素直がは身と久しひ 欣友遠ごうら 那男うら

そりく 後どうけく お茶のやまを 懐へて 寄る 狭
うを居るうら お茶ハ 先言て け身のなる 通るふ
えうらて 居るふ 居る遠へねせ 丹下モ 此のう 懐へ
まをと死んても 本をを どのかまを 女ハどのうら
かうどのうら ト話の打しも 隣の家をより 那好
虎が女を居るを見つけしと けり 松子あき 好
女まんある所へお目あうら 中へよト 言ふはを
遠方ハ 態と その 時氣の 付ことけり 顔せして

イヤア是ハ奸大人一別以来打絶てお目お掛り
中へえんぶ大かお賑中へお目お掛り
奸ハハイ女中方の宰願サお茶きんぐ六あ差向
まへ六他おお連でもあつてお結合せるさるのりさ
二世帯二個ぐさつたりさつたりねん伏サ
おやア下夜宜うりやと是るさつ出入の福者
おの別を借く一盃飲うとよ執向さ女中
流の仲へ男と言つてお松さつり心と奥のさの伏

だと思つて居るさつお前きんぐさもぞへお掛
遊ぶある一他へお思んさつるのをさつ六那別
是れおお出さつたりねん又さつたりお結絶や
くありさつ女中方の願とさつたりやせうト言
是れ這方ハ波りお目と二個六目と目を見合せ
つてさつはさつとさつたり有るお目とさつたり
候折角の目お山お目お邪サとさつたりさつたり
奸ハ二さつきんぐハ縁へお別際さつとさつ一個のお方も

お名^なの^なあ^あら^らの^のけ^けは^はど^ども^もた^たら^ら外^が丸^まの^の山^{やま}家^か来^き心^{こころ}
 お頼^{たの}み^み存^{ぞん}知^ちく^く居^いり^りま^まは^はく^く遠^と方^ちでも^も一^{ひと}向^{むか}山^{やま}科^か
 紋^いの^のい^いし^しま^ません^んト^と是^{これ}より^{より}姉^{あね}く^くま^まめ^めく^く他^{ほか}と^と侍^{しやく}ら^らち
 連^つる^る福^{ふく}富^{とみ}の^の別^{べつ}荘^{じやう}さ^さう^うて^てを^を教^{おし}え^えけ^ける

珍^{ちん}説^{せつ}千^{せん}代^{だい}碯^{いん}二^に輯^{じつ}中^{ちゆう}了^{りやう}

誠^{まこと}忠^{ちゆう}列^{れつ}傳^{でん}を^を著^{しやく}す^すの^の定^{ぢやう}句^く讀^{よみ}講^{かう}叙^{じゆ}珍^{ちん}説^{せつ}千^{せん}代^{だい}碯^{いん}二^に輯^{じつ}卷^{くわん}之^の下^げ

東京 烏永春水著

第十一回

什^{しつ}麼^ま仁^に木^{ぼく}が^が妻^{つま}と^とい^いふ^ふハ^ハ其^{その}名^なを^をお^お羅^らと^と呼^よぶ^ぶま^まじ^じ
 卑^ひ賤^{せん}者^{しや}の^の處^{ところ}女^{によ}り^りし^しを^を宮^{みやう}院^{いん}の^の幽^{ゆう}絶^{てつ}の^の京^{きやう}都^とが^が觀^{かん}め^め
 金^{かね}と^とい^いふ^ふ彈^{だん}正^{しやう}が^が家^かめ^め多^た抱^{だう}へ^へ馳^ちて^て妻^{つま}と^とい^いふ^ふけ^ける^るが
 素^{もと}ら^らの^のお^お羅^らハ^ハ鎌^{かま}倉^{くら}め^めて^て花^{はな}樹^{じゆ}み^みは^は育^{そだ}つ^つて^て女^{によ}み^みど
 此^{こゝ}も^もあ^あら^らの^のと^とう^う賤^{せん}の^の男^{おとこ}と^とい^いふ^ふ者^{もの}は^は人^{ひと}の^の知^しら^らず^ず

人馴ひとなうらふうらふあふあふあつあつまきまき利り発はつるるはは仁に木ぎがが心こみ
注つくく懐くわいひひ此この者ものううららぶぶ一ひと大おほききをを打う明あけけてて考かんふふとも
為なすす積つみりりまま〜〜思おもふふああどどけけ度ど針はりをを言いひひ合あひひ松まつ橋はし
塩しほ竈かまど石いし巻まきそのその他ほか各おの所ところ回まわ路みちをを見けん物ぶつささととるると
言いひひののままままくく籍せきふふ本ほん國くにへへつつららせせ〜〜ままりり諸もろもも福ふく富とみ
屋やとと修しゆづづ〜〜ハハ骨こつ魚ぎよ一ひとのの分ぶん限げん者ぶああ〜〜其その別べつ産さん之の縁ゆかりと
よよりり塩しほ竈かまど指さしのの帰かへりり火か火か立た寄よるる〜〜まま物もの東あづまゆゆもも福ふく
富とみをを方かためめ〜〜もも仁に木ぎハハ出で時とき権けん勢せいのの家いえ老らう号ごう困くわん

ああららぬぬ客きやく人にんとと酒しゆ肴やくのの縁ゆかり設たてけけ庭にわとと見み晴はららとと別べつ喜きふふ
毛け櫃びををどどああいいまませせおお蒸むのの釜かまとと待まちわわいいふふかかぐぐ
件けんのの一ひと群ぐんののどどああ〜〜とと入い来きりり設たてけけのの産さん安やす〜〜通とほるるゆゆと
縁ゆかりとと産さん備びのの酒しゆ肴やくをを福ふく富とみふふよよりりもも〜〜出でせせと
這こ方かたもも持もち森もりのの携かひ盒はこ小こ竹たけ筒つつ所ところ狭せままま〜〜産さんとと〜〜
皆みなううらら寄よるるそのその酒しゆ盛もりもも貝かい那なとと言いひひつつららいいおお蒸む〜〜人ひと
天あま窓まどののつつららぬぬ也や供くわんゆゆ糸いと彼か好こう添ぞうををとと〜〜とと〜〜
才さい右みぎ左ひだりののハハいいふふああ〜〜とと腰こし衣え牌はい女によみみのの〜〜とと〜〜

しらをたがしそ 欣こころやふ待まちわり 研けんの 酒さけ 機はた 懸けん 産うぶ
菱しんの 内うちで 六む 具ぐありと お 藤ふじと 先まへの 腰こし元もととも 酒さけ
肴さかなを 携たづへて おのく 庭にわふ 山やまを 実みふか 根ね老らうの
好このとと 幾いく多た輝ひる 廣ひろ庭にわの 泉いづみは 築つく山やま 植う木き
室むろ四季しきの 籠かごを せと りぐ 小こ工こも 景けい色しきあもり
まど 友ともの 芝しば生な波なみの 茶ちや亭てい 思おもひく 小こ立たち 小こ川がわを
携たづへる 湯ゆを 飲のみ 六むの 目め 深ふかく 鬼おに 波なみと 白しろ色いろが
勝かちるに 駈かけ 廻まわる その 時ときは 霖れんハ 築つく山やまの ところ あり

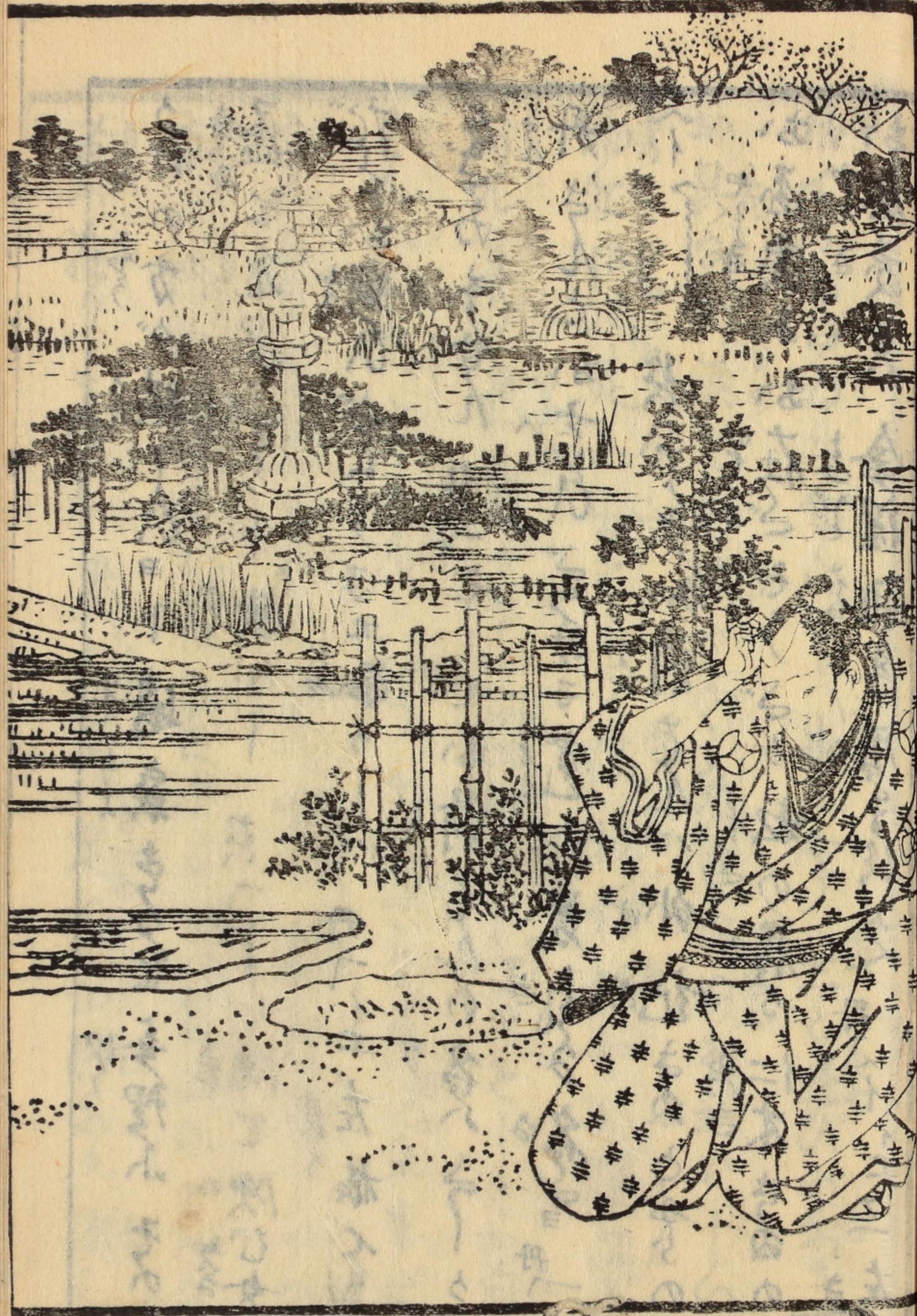
四よ河が 屈かふ 獨ひとりり 立たち 寄より 心こころと 息いき 小こ工こも 大おほき
澄すみい ざう 息いきが ながんを 苦くるく 小こ川がわを 遠とほく 遠とほく
でも 飲のみ 酒さけを 酒さけを 飲のみ 酒さけを 飲のみ 酒さけを 飲のみ 酒さけを 飲のみ
アテ せん なが 何なに 所ところを 澄すみい 小こ川がわを 行ゆき 小こ川がわを 行ゆき
宜よろし 小こ川がわを 行ゆき 息いきが 小こ川がわを 行ゆき 息いきが 小こ川がわを 行ゆき
言いひ 小こ川がわを 行ゆき 小こ川がわを 行ゆき 小こ川がわを 行ゆき 小こ川がわを 行ゆき
おし 小こ川がわを 行ゆき 丹に 助すけハ 小こ川がわを 行ゆき 小こ川がわを 行ゆき
お 六むの 人ひとの 澄すみい 小こ川がわを 行ゆき 小こ川がわを 行ゆき 小こ川がわを 行ゆき

折もゆらばと思ひ居し今幸ひぬお霖のうら
四阿ふ存るゆふよき首尾の近きと思ひ
のうらを言ひて罷立申すもまより小
きの丹助も言はく恥くしよふ剣もあつた
ぬるぬるをしてお霖の方を見送りぬ
痛むて居りしがお霖は使とも急がつた
つぎ一盃を申すお霖は飲りて遠方を
返るとき丹助と顔見合せお霖は
お霖さんハ

先刻つらき折ぬはの久トなめてお霖ぬ
とくけらる丹助の物ドキアキ丹ハいぬま
色が買うごごわもはく緑めて居りま
から然うと知らせお霖も買ぬ私あや
獨りで寤ぬ淋しくらてさるんヨ鳥渡
お出さるヨ丹ハ春も買うごごわませう
ヲヤフ遠く海にさるん誰がらるのと
そんな笑ひを言ひて遠行へお出さる

トまゝなるまゝに丹助入ぞくくするやど膝しよふ安じ
足さ地ふつとど躰てお霖が体と居る那四阿
あふあひひけバ 其へサ島渡ひと進ませヨト
最前の盃をグイト飲ぶさうおせバ 丹ハ有終ふ
お霖あ入らさの久 丹ハイエく何故しとせんあ
てらどお霖あ入せんが実正お霖相法をどぞかまは
アレサお霖あ入ら 飲ぶどけ 飲ぶ路をおよこし
お霖あ入らさの久 丹ハイエく何故しとせんあ
てらどお霖あ入せんが実正お霖相法をどぞかまは
アレサお霖あ入ら 飲ぶどけ 飲ぶ路をおよこし

私しがまけるうらト多度お霖あ入らて盃を
かきくと酒を飲ぶみぞ丹助性来ト戸あつ
一盃の酒小園り果しが是を飲ぶ女のかふ
慥いぬるべしと盃の踏ふ口をさう寄せ 怖と
居る顔をお霖あ入らて完お霖あ入ら 笑ひ 丹ハ
お前さんハ実正お霖あ入ら下戸あつ久あしや
丹ハイエくも私の飲けを進めお霖あ入ら
まはら 丹ハアヤ何ぞ子エ私まはらお霖あ入ら



岸や人け
あぢう
飛鳥川

うけの方が膝しひヨト遠^{とほ}氣^{いき}まるを^を無^む理^りふその
盃^{さき}を^とえつて^とグイト^{グイト}飲^のかー^の 飲^のかー^の 酒^{さけ}を^の飲^のむ女
だとお男^{おとこ}ひごら^ら子^こ工^こ取^とりし^し 丹^に一^{いち}工^こ左^さ振^ふ心^{こころ}も
ごらあません 飲^のかー^の お前^{まへ}を^のん^のの^の名^な入^いらう^う
丹^にさん^{さん}とおさ^さひ^ひご^ごけ^け子^こ寔^{じつ}小^{せう}意^い氣^きな^な名^なご^ご丹^に
へ^へ~~~~ 飲^のかー^のお前^{まへ}を^のん^のハ^ハ外^が記^きさ^さぬ^ぬと^とや^やの
お屋^や敷^{しき}ふ^ふお在^ぞご^ごそ^そう^うご^ごか^か私^{わたくし}の^の居^かる^る 仁^に本^{ほん}さ^さぬ^ぬの
お公^{こう}委^いと^と金^{かね}程^{ほど}難^{なん}き^き居^かる^る久^く之^の 丹^に一^{いち}工^こ左^さ

振^ふて^てご^ごら^らま^ません 飲^のかー^の 飲^のかー^の 飲^のかー^の 飲^のかー^の
お其^{その}な^なお酒^{さけ}を^をお飲^のま^ます^すご^ごら^らま^ません 飲^のかー^の 飲^のかー^の
物^{もの}を^を由^{よし}進^{すす}走^{そう}ぬ^ぬお^おま^まご^ごら^らま^ません 飲^のかー^の 飲^のかー^の
おん^{おん}ま^まり^り色^{いろ}あ^あが^がた^たの^の子^こ工^こ取^とりし^し。 飲^のかー^の 飲^のかー^の
おん^{おん}ハ^ハお内^{うち}室^{むろ}さん^{さん}が^があ^あり^りま^まは^はご^ごら^らま^ません 飲^のかー^の 飲^のかー^の
おん^{おん}あ^あま^まご^ごら^らま^ません 飲^のかー^の 飲^のかー^の
方^{かた}が^が内^{うち}の^の侍^{さむらい}の^のて^てお^お在^ぞる^るま^まら^ら丹^に一^{いち}工^こ左^さ振^ふ心^{こころ}も
者^{もの}ハ^ハ在^ぞる^るま^ません 飲^のかー^の 飲^のかー^の 飲^のかー^の 飲^のかー^の

言ひくわいしおあしきあがりませう子丹ハイキ
せん者ハゴゴカキせん 丹ハサせんああ張し
くつてもひの子地め関人のあるあやアキア前
せんの地もあつと受て見しの子エ右極もあ
せんの極あは教も利くど溫和しそしき素気
お方と假令堅くしてお在ても余証の腹や内
まきん達が見道しく重く答がありませんもの
丹ハ何れも実証の腹の緒と切つてせんあひま
あ

ししひのあいのこころをいおあしきあがり
まマアアアアアアアアアアアアアアアアア
づつて本の腹うらあ産まはあするまのしけし
那腹ハ好アアアアアアアアアアアアアアア
お思ひのりん在りませう子丹ハイト言ひま
言ひまをいひくねしお思ひ切つて丹ハま
あつて顔と真赤あしき極向く 丹ハアアア
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ

あまをいふはまはつきのを ねのしは 雅が笑ふもの
りよその人の名を言つてお図せよお言ひせりいと
極るヨト酒が言ひさるさ道とさ 極めらるもの
めりゆゑり居まのよえもとり礼し丹助が剣へ
まの寄るは 遠方へおも裏くたさるり 何と言ひか
言らるる中へおぬくまが先さく思ひ言ひつて
言ひるるを速くも文と見とるお器 べて
究る究ふおまのよのし 丹へお疝瘕をも發り

ましつら ねのし疝瘕べりまのヨアア。そをましく急め
廣が起るくアイタアイタ 丹へおまのまア 困る
こととどどかまはまにまはれお業でもあるとよのしが
まのまの入りらるのがまを少し極くお異んまの
アイタアイタトさも苦しそふ頼とあつて極向く
あま丹助の怖るるお器の後ろくを寄りつて
狗のゆゑりを率度極せば ねのしサを折らる
かのヨ遠ふを初うしくお異いと言ふまサト懐の月

あて丹助の多をあらうり極り 其言初うつる人
ちやや何とお言ひでも放しやなるのヨとんどねるお
見込事ごとと思つて堪忍しくお呉んるものト言ひ
丹助の顔を見れば尻目ふけ完承笑ひ一哭しき
遠方ハ余りの焼くさふ歯の根も合つて身ハ我
丹アレマテ怪ぞ見ると悪うござる方また 其つるんごま
お茶せんも男のせうでもの完う初うあらちや
怪見やうと構ふことかひるものつとひらうるる
あて丹助の多をあらうり極り 其言初うつる人

其折しも築山の那方より櫻元ともがざやくと
此方とさうして来るは音流石のお森も多と
放せば丹助怪き飛び退ひく喘息ついでと居りける

第十二回

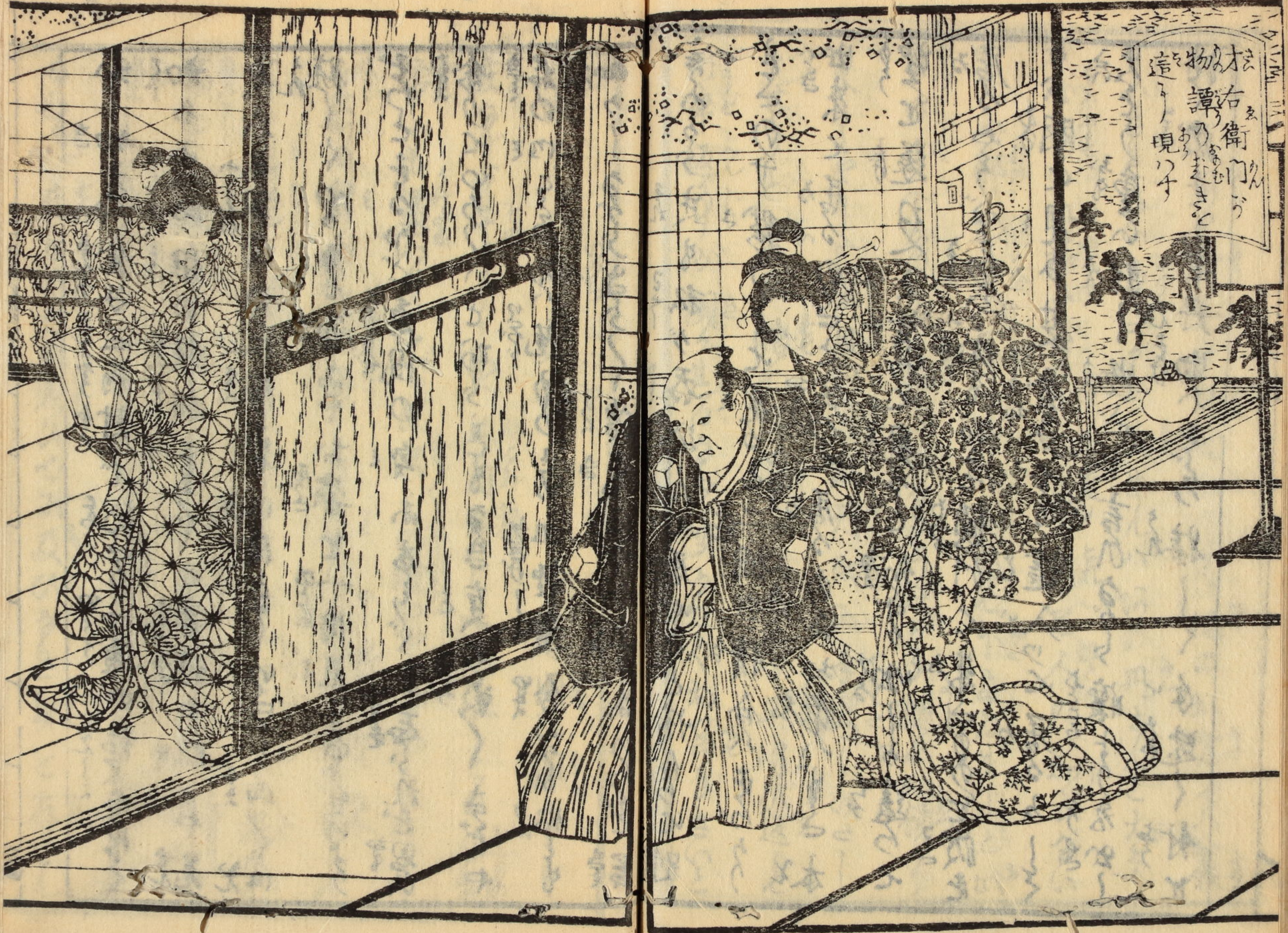
却て待て寄る集り酒宴も完早色まむと歸り
は度ふるやご丹助ハ本意あけまごもやを
へき便宜もさく其日ハ空しく別道つづ緒我が
屋小豆度ほどお森がりのと梅小豆度六外床

いりても寐つらきほど擲りつらぐ考へるがゆへもあ
森が先刻のそぶり各身ゆへ十分気がなる花子
も此と違く違方う言ひおせば宜うさふおのひ
切つが悪いゆへ遠くをききこたうり心接えども
船中とて道情の行で果放るの別と全体最初
盛とよき時うらとわらふ同つき那とて並ふ言ひ
考へるが如く世にうらとわらふ同つき那とて並ふ言ひ
こつ寝るさぬさぬ種くと悔んで見ても此のまう

そぐつぬ縁と縛めて寂着引くまじどお森が
顔の目先ふつらう放まぬと公と余のふえと
終らう思ひ並しと睡眠バ憂ふりうくお森が
姿寐ても覚ても現中憂ゆも思ひ忘らまぬバ
次の日外紀が側み出てもゆとやうさうくと言ひ
まう用も手ふつらう初くて四日あつらう或時
の支存簿の丹助の船屋み来りやうけろくさど
お森外ならうらう私しやひびく映さうらんづら

懐くうらなう射し物を出し、他のお方へお教
め下さるういひ下さるお茶さんハ何の丹さんと大
お心易いお振まづらう御座是れ人の知らうい
やうお那お方へお尋しつゝお為下さるまゝとい
身の事へおのり極らせらるうさう懐のお願う
ゆるしやうと望目ハ多度丹助お手放しとい
おせうと言ひ捨て帰らうとあつた又お返と
行率返りしが聞かざるさうおせうおはるまゝとい

言ふうらまも私お存込んで居やまとい情合に別
れこのお然うして見ると二個の情合ハまづら
出来て居るのさと思つて居るのよお茶さん本
望を遂ね人と言つて見ると何ぞか咄しが遠ら
居るやうお初めお茶も何れお願ひて居るのよ
ら明く見なせ金子をも遠入つて居るらう
大さう重い針物ごと言ひさう懐よりお出
はく渡さぬぞ丹助おさう懐しくお迷く針



松右衛門の
物言ひ
遠く
譚の
現るす

お一切きまは金子きん三兩さんりやう封ふうト込こめ一いつ通つうの籠かご書かに
初はつめめ時とき候けうの換か投たうと書か忍にんむ依よと先せん
のふ不ふ思し養やうの以い極ごく也や也や同どうのの一いつ山さんくく也や
疑ぎくくくりりるるののああややおお婆ばと一いつ同どう凡ぼんままののせせいいらら
ぞぞととままるるややとと意い固このの身みふふああららぶぶとと忘わすれれたた思おもひひ
余あまりりててゆゆくくととああららははままるるままのの数かずくくささぞぞやや
君きみのの心こころもも西さいのの花はなものもののの心こころ程ほど漫まん今いまささららににもも
心こころりりーーままららささららくく際さいもも中ちゆう上じやうふふりりんんどど君きみ

ゆゆああららぶぶ命いのちをを惜おぼししむむととままをを思おもひひ探たづねねりり
ままららぶぶままふふーーああらら人ひと目めままくくててああららぶぶととのの心こころ物もの
語かたりりもも美うつくししききららりりたたままららびび只ただくく心こころ残のこりりととんんどどりり
ままららぶぶ身みをを浅あ狭せまししききりりとと義ぎ度たのの思おもひひ並ならべべ
ててもも月つき老らうのの信しんびびーーああららああんん情じやうのの目めもも深こほひひ
須す臆おそぶぶががららももここのの思おもひひ切きりりははけけ程ほど
燈とはは深こほんんよよりりせせめめててああらら君きみかか一いつここのの心こころ言こと葉はとともも掛か
ああららぶぶ交まじりりとと世よのの思おもひひふふ及およびびるるまま身みとと存ぞん生せいんん

先方より言ふの通り家と見ゆる女の方
うけくらの言つてよとてのりよくくお茶と思
夜も中出する夜も中ねせお茶とて那女の
夏ハ家知すもんきうでもく思つて居る所へ
先方より物入り了るを互ひに相物の中より
右も別み仔細くねううと恐んを来のうと性が
宜ひな形う言つちやうありと感得づくぬ物
つる中よりけきどもお茶さんうんきう容貌ハより

いづれもま

金ハ自由なまらうとてんま女と情合あるまら
お茶のめいりもともお茶のめいりも
うら今夜より翌の晩よりお茶の方の都合
次方にて恐んを仕ううと言ひて返すの書に
せんうせは其のまう早速お居けて参るうら
言ひまて丹助思ふ中も及ば馳て返書を恐ん
女右邊のゆぞ候しける

是よりお茶が元お恐んが那が毒斗に没入

丹助が誠公隨落終小汚名を還さ小取
委一くハ第三輝の初條小税べ
珍説千代碩二輯下了

朝鮮 ぎやう 牛肉丸 にくがん
名方 一色入百銅 十色入金鼠朱

江戸下谷三味線
對州上屋舖

深崎氏製

此薬は第一脾胃を補ひ腎精を滋一疲衰する小肉丸つきのもの
病を去ると妙なり虚弱の人常用ひくその功效を知らぬべ

江戸下谷三味線

